

## <1>1920年代初めの青年会の勃興

journal or publication title	The Rule and the Local Society in the Japanese Colonial Empire
volume	40
page range	171-175
year	2013-03-18
その他のタイトル	<1> 1920 nendai hajime no seinenkai no bokko
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00002401">http://doi.org/10.15055/00002401</a>

青年会を組織したという新聞記事があるが、エプワース青年会の可能性もある<sup>37</sup>。また、黄海道載寧でも青年の矯風を目的に載寧青年修養会がつくられた<sup>38</sup>。全北の金堤でも1918年に金堤青年俱樂部が組織された<sup>39</sup>。だが、これら数少ない青年会は活動もさほど活発ではなく、やがて財政困難に陥ったりしてうやむやになってしまう。

以上、韓末から1910年代までのYMCA・エプワース青年会・青年学友会・一般の朝鮮人青年会を概観した。これらの青年団体はおおむね、その目的を教育と修養・風俗改良・意識啓蒙などに置いており、その目的を達成するために講演会や討論会・運動会などの事業を展開していた。1918年までのこのような青年運動は、1919年の三・一運動以後雨後の筍のように誕生した青年会の運動目標や運動方法に相当の影響を及ぼしたと考えられる。

## 2 三・一運動以後の青年会の組織様相

### (1) 1920年代初めの青年会の勃興

三・一運動で青年・学生層が先導的役割を果たしたことから、青年層に対する社会の期待が大きな高まりを見せた。すなわち、青年層はすでに1905年頃より新文明と近代世界の主役として注目されていたが<sup>40</sup>、三・一運動後には民族の将来を担う主体としてさらに脚光を浴びることになったのである<sup>41</sup>。たとえば、『東亜日報』に掲載された金濫植の「青年の使命」という一文では、「国家や民族の隆盛と政治の適否、教育の振興はすべて青年の双肩にかかっているといわざるを得ない。それゆえに青年の行為と思想は必ずや国家や民族の中心とならねばならない。すなわち民族の中堅、これが我ら青年の使命だ」と述べている。そして、この一文では、青年のなすべき仕事として、政治思想の提起・産業の振興・科学の研究・道徳の研究・宗教の改革・教育の普及などを挙げている<sup>42</sup>。

このような折、三・一運動の收拾のために新たに朝鮮に赴任した斎藤実総督は、いわゆる「文化政治」を標榜した。「文化政治」とは、一方では言論・出版・集会・結社の自由をある程度許しながらも、もう一方ではこれを厳しく統制するという統治方式であった。しかし、一定の自由が許容されると、新教育を受けた青年の間に、「文化向上」と「実力養成」を唱える、いわゆる「文化運動」が起こった。そして、このような文化運動を推進する主体として、青年会が雨後の筍のように全国各地で現れた。当時の日帝支配当局としては、青年会の急激な勃興について、「当局ニ於テ或程度迄言論集会ノ自由ヲ寛容シタルト一面ニ於テハ青年カ朝鮮独立ノ不可ナルコヲ悟ルト同時ニ仮令一視同仁ノ聖世ニ処シテモ実力ヲ養成セスハ容易ニ文化ノ向上ヲ達成シ能ハサルヲ自覺シタル結果ニ外ナラス」

37 『毎日申報』1918年3月14日、「鎮南浦에서 青年会 組織」。

38 『東亜日報』1920年5月15日、「載寧青年会 組織」。

39 『東亜日報』1920年5月23日、「金堤青年会 發起総会」。

40 李基熙、前掲論文、38～39頁。

41 安建鎬、前掲論文、56～57頁。

42 『東亜日報』1920年6月21日、「청년의 사명」(金濫植)。

と解釈した。<sup>43</sup>「一視同仁の聖世の下での実力養成が目標」だったといういささか当局に都合のよい解釈であったが、朝鮮の青年会が実力養成と文化向上という旗を掲げて広範囲で立ち上がったことだけは事実であった。

1919年の三・一運動以降では、8月頃から青年会が組織され始めた。『毎日申報』によると、8月に慶尚北道蔚珍の青年有志が知識啓発と民風改善を目的に蔚珍青年会を発足させた。<sup>44</sup>また、咸鏡南道安辺でも知識啓発と風紀改善を目的とした安辺青年会が青年有志によって組織された。<sup>45</sup>さらに、平壤でも知識の交換・友誼の敦厚・元気振作・修養などを目的に平壤青年倶楽部が組織され、<sup>46</sup>慶南統営でも同年夏に有志青年が新知識の啓発・精神修養・悪弊改良などを目的として統営青年団を組織した。<sup>47</sup>

ところが、9月から12月にかけて、『毎日申報』には他の青年会の組織に関する報道がほとんど見当たらない。おそらく一定の報道統制があったものと思われる。1920年の『毎日申報』と『東亜日報』の報道によると、この時期に咸鏡南道定平において定平青年倶楽部が組織されていた。<sup>48</sup>また、黄海道の黄州においても黄州青年会が12月に組織された。<sup>49</sup>そして、全羅南道潭陽では同年12月末、友誼親睦・智徳涵養・哀慶相問・体育発展・悪風矯正などを目的として潭陽青年修養会が組織された。<sup>50</sup>したがって、数は少ないが、1919年秋には一部の地域で青年会が組織され始めていたことがわかる。

1920年に入ると、青年会の創立は著しく増えた。1月には全羅南道羅州で、以前から存在していた羅州倶楽部が羅州青年倶楽部と改称された。<sup>51</sup>慶南金海でも、1910年代の中頃に組織された金海青年倶楽部を改称して、金海青年倶楽部が発足した。<sup>52</sup>忠南天安でも青年有志が新聞雑誌や巡回文庫の設置、知識啓発と産業発達に関する講演会の開設などを目的に、天安青年倶楽部を設立した。<sup>53</sup>2月には慶尚南道蔚山で、風紀矯正・徳育涵養・実業研究・体育発達などを目的として蔚山青年会が組織された。<sup>54</sup>全南靈光でも有志青年の発起によって靈光青年会が、品性の陶冶・通俗教養の涵養・体力増進・風俗改善を目的に組織された。<sup>55</sup>3月には慶北の大邱で、徳性涵養・知識交換・友誼敦睦・体育発展・勤儉貯蓄などを目的に大邱青年会が設立された。<sup>56</sup>また忠南公州と忠北の清州でも公州青年倶楽部と清州倶楽部

43 全羅南道内務部『青年会指導方針』（1922年）1～4頁。

44 『毎日申報』1919年8月14日、「蔚珍의 青年会」。

45 『毎日申報』1919年8月26日、「安邊의 青年会」。

46 『毎日申報』1919年8月30日、「平壤青年倶楽部 組織」。

47 『東亜日報』1920年4月18日、「統営青年団과 斷酒同盟会」。

48 『毎日申報』1920年3月6日、「定平青年倶楽部 状況」。

49 『東亜日報』1920年5月21日、「黄州青年 春季運動」。

50 『毎日申報』1919年12月28日、「潭陽青年修養会」。

51 『毎日申報』1920年1月17日、「羅州倶楽部 総会」。

52 『東亜日報』1920年4月19日、「金海青年 奮発」。

53 『東亜日報』1920年4月23日、「倶楽部 講演会」。

54 『毎日申報』1920年2月22日、「蔚山青年会 発会式」。

55 『東亜日報』1920年4月19日、「靈光青年会」。

56 『毎日申報』1920年3月4日、「大邱青年会 設立」。

が設立された。<sup>57</sup>そして咸鏡南道の利原では利原青年俱樂部が親睦・知識啓発・運動奨励などを目的に設立された。<sup>58</sup>

このような中、1920年4月1日に『東亜日報』が創刊された。『東亜日報』は創刊号およびそれ以降の紙面を通じて何度となく青年層の覚醒と奮発を促している。まず、創刊号ではスコフィールド博士の寄稿文を通じて青年の覚醒を呼びかけた。<sup>59</sup>4月2日にはモフェット牧師の文章を掲載し、青年に飲酒・喫煙・淫行などの悪習を棄て、悪に抵抗しながら正義のために力を尽くすよう促した。さらに彼は、政治経済上の生存競争の中でしっかり自立し、しかも他の人々とも並進できる強健で清潔な心身を保つよう求めた。<sup>60</sup>同日、中国の燕京大学の校長であるスチュアートは、アジアの将来は青年男女にかかっていると述べ、青年は(1)奉公精神に基づいた人格を備え、(2)近代的な実業生活にふさわしい実地教育を受けねばならないと主張した。<sup>61</sup>

『東亜日報』はまた、以前の『毎日申報』とは対照的に、紙面を通じて各地方の青年会の創立と活動消息を詳しく伝えた。これはいまだ青年会を組織していない地域の青年を大いに刺激したと見受けられる。1920年4月および5月の『東亜日報』に報道された青年会の創立と活動消息を見ると次の通りである。

- 4.12. 京城の東大門の外にある永導寺で「青年協会」発起。義州青年俱樂部懇親会。
- 4.18. 統営青年団、斷酒同盟会組織。
- 4.19. 金海青年俱樂部、金海青年会に改称。咸興青年俱樂部、運動会の開催。靈光青年会、この年2月組織。
- 4.23. 天安青年俱樂部、今年1月組織。
- 4.26. 義州青年俱樂部の懇親会。
- 4.30. 咸北の富寧面沙口洞の青年、信睦会組織。
- 5.3. 南原青年会、遠足会。全州青年会修養会、知育部討論会開催。
- 5.4. 群山の青年たち、庚申俱樂部組織。
- 5.8. 徳原の赤田面堂隅里の青年、青年俱樂部設立。論山青年俱樂部組織。
- 5.9. 陝川郡草溪面草溪青年会組織。済州青年修養会主催の運動会。
- 5.10. 済州青年修養会主催の運動会。
- 5.11. 定平青年俱樂部主催、講演会。
- 5.14. 慶南の巨済郡岐城面の青年、岐城青年会を組織。
- 5.15. 載寧青年会、木浦青年会、海州郡の首陽青年会、大田青年俱樂部組織。
- 5.15. 鎭南浦の三和青年会の復活、安城の青年夜学会発起。

57 『毎日申報』1920年3月15日、「公州青年俱樂部 組織中」、1920年3月23日、「清州俱樂部 設立」。

58 『毎日申報』1920年3月30日、「利原青年俱樂部 設立」。

59 『東亜日報』1920年4月1日、「朝鮮發展의 要訣」(スコフィールド)。

60 『東亜日報』1920年4月2日、「朝鮮青年에게 寄함」(馬布三悦)。

61 『東亜日報』1920年4月2日、「朝鮮青年에게 寄함」(スチュワート)。

- 5.19. 益山青年俱樂部創立。
- 5.21. 黃州青年會、運動會。
- 5.22. 天安郡稷山青年俱樂部組織。大邱青年會組織。
- 5.24. 金堤青年俱樂部組織、全州青年俱樂部的總會、義城青年團組織。
- 5.25. 延白郡白川青年矯風會を組織。
- 5.26. 洪原青年俱樂部發起。
- 5.30. 江景青年會の組織、平北の泰川郡青年俱樂部發起、青年會組織。

上記記事を見ると、5月に入って全国各地で青年会が多数設立されていることがわかる。特に『東亜日報』で青年会関連の報道が続くと、それが全国各地の青年を刺激し、青年会設立ブームを巻き起こしたと考えられる。朝鮮総督府の統計によると、1920年代末、青年会の総数は251に達したというが、その大多数は1920年に設立されたものであった。青年会の設立ブームは以後も続き、1921年には446、1922年には488に達した<sup>62</sup>。つまり、1921年には195増え、1922年には44増えたことになる。これらの数字から、1920年に最も多く青年会が設立されたといえるだろう。

そして特記すべきは、村単位でまず青年会が組織され次いで町村で青年会が組織された日本とは異なり、朝鮮の青年会は主に郡・面単位でまず結成されたという点である。むしろ一部の村落で青年会が組織された場合も見られたが、それは極めて少数であった。たとえば、1920年4月、咸鏡北道富寧郡富寧面沙口洞では、青年が富寧青年信睦会を組織している<sup>63</sup>。1920年6月には黄海道南栗面海昌里で海昌青年会が組織された<sup>64</sup>。また、同月、黄海道載寧郡北栗面餘勿里で餘勿里青年会が結成されている<sup>65</sup>。ただし、このような青年会の数は極めて少ない。大多数の青年会は各郡または面を中心に組織されていた。以上から日本の場合、明治維新以前に「若連中」という青年団体がすでにあり、それが青年会に改編されるという過程を辿ったのに対し、朝鮮の場合にはそのような団体がなかったため、まず郡単位を中心として青年会が組織されたと解釈されよう。また、青年会組織を主導したのは大半が普通学校卒業以上の学歴を持つ青年層だったが、1920年代初頭でも普通学校は郡単位で1～2カ所しかなかったので、村落レベルで青年会を組織するのはまだ無理だったと考えられる<sup>66</sup>。

62 朝鮮総督府編刊『朝鮮治安状況』（1922年）179～180頁。これとは別に、監理教系のエブワース青年会、長老教系のミョンリョ青年会、YMCAの支部的性格の基督青年会などの宗教系青年会が、1920年に98、1921年に226、1922年に271があった。それ以外にも、禁酒・修養・社交団体の場合もほとんどは青年の組織した団体だったから実際の青年団体の数はずっと多かったものと見なければならぬ。

63 『東亜日報』1920年4月30日、「富寧青年信睦会」。

64 『東亜日報』1920年6月20日、「海昌青年会講演」。

65 『東亜日報』1920年7月2日、「나무리青年会 조직」。

66 1920年代初め忠南と全南のマウルには振興会という組織が入り込んでいた。これは忠南道と全南道が推進した事業で1920年5月の全南には振興会が67あったという（『毎日申報』1920年5月22日、「全南 振興会 発展」）。

付言すれば、この時期には各地方で女子青年会も組織されていた。1920・21年に女子青年会が組織された郡を挙げると、黄海道信川・載寧・安岳・海州・黄州、平安北道宣川、平安南道江西、咸鏡南道咸興・元山・定平、咸鏡北道城津、京畿道江華、慶尚南道釜山・密陽・馬山などで、とりわけ黄海道の多数組織されたことがわかる。<sup>67</sup> もちろんこれ以外にもキリスト教系の女子青年会がかなりの数存在し、特に中南部地域では女性は主にキリスト教系の女子青年会を組織して活動していた。

## (2) 青年団体の趣旨と活動

では、当時の青年会はその設立の趣旨としてどのような目的を掲げたのか。1920年上半期に組織された青年会の例を挙げると、表1の通りである。

表1 1920年上半期に組織された青年会の趣旨と目的

青年会の名称	地域	趣旨および目的
靈光青年会	全南 靈光	趣旨：品性陶冶、通俗的な教養の涵養、体力増進、風紀改善 目的：新聞雑誌購読、学芸会、運動会、遠足会、討論講演会
群山庚申俱樂部	全北 群山	趣旨：知徳体の涵養、美風の助長 目的：図書、新聞雑誌購読、運動部開設、討論会開催
木浦青年会	全南 木浦	趣旨：知育、体育の向上発達
益山青年俱樂部	全北 益山	趣旨：知識の交換、美風の助長、体育発達、文化普及
清州青年会	忠北 清州	趣旨：品性向上、知識啓発、体育奨励、風俗改良
博川青年会	平北 博川	趣旨：知徳体の三育の発達、実業奨励
海南青年会	全南 海南	趣旨：矯風、勤儉貯蓄

表1に見る青年会は、主に郡ないし面単位で組織された青年会だった。これらの青年会は、主として修養のために智徳体の涵養・風紀の改善・実業の奨励・公共事業の支援などを掲げている。また、これらの趣旨を達成するために目標として掲げた事業は、図書・新聞・雑誌の購読、講演会・討論会の開催、運動会の開催などであった。もっとも村落の青年会は若干異なっている。たとえば、黄海道新溪郡美水面芝里の美水青年会は「交誼親睦・知識啓発・風俗改良・農業奨励・公共事業の助長発展」などをその趣旨として掲げていた。<sup>68</sup>

このような中、『東亜日報』は1920年5月26日付の社説「各地域青年会に寄せて」で、青年団体の使命を五つに要約しているが、それは親睦・修養（道德・風紀改良）・知識交換・体育発達・公共事業（勤儉貯蓄・産業奨励・共同購買・共同組合）などであった。<sup>69</sup> また、1920年に組織された朝鮮青年連合会の場合も、社会を革新し知識を広く求め、健全な思想により団結し、徳義を尊重し健康を増進し、事業を振興させ、世界文化に貢献することを綱領として標榜していた。<sup>70</sup> また、連合会は青年団体間の親睦・知徳体の三育・風俗改良・

67 『東亜日報』1920年6月15日、「咸南女子青年会 講演」など参照。

68 妙香山入「農村青年会의 設立을 촉함」（『開闢』第7号、1921年1月）44頁。

69 『東亜日報』1920年5月26日、「각 지역青年会에 寄하노라」。

70 『東亜日報』1920年7月16日、「朝鮮青年会連合期成会」。